

ジョアキーノ・アントーニオ・ロッシーニ

Gioachino Antonio Rossini, 1792年2月29日 - 1868年11月13日^[1])は、イタリアの作曲家。多数のオペラを作曲し、『セビリアの理髪師』、『チェネレントラ』などは現在もオペラの定番である。また『タンクレーディ』、『セミラーミデ』などのオペラ・セリアも作曲した。フランスに移ってからはグランド・オペラ『ウィリアム・テル』を書く。美食家としても知られる

ジョアキーノ・ロッシーニ(Gioachino Rossini, 1792-1868)**は、イタリアの作曲家で、特にオペラの分野で非常に重要な存在です。彼は短期間に多くのオペラを作曲し、その多くが今日でも上演されています。ロッシーニの音楽は、その活気に満ちたリズム、魅力的なメロディー、そしてユーモアで知られています。また、彼の作品はオペラ・ブッファ(喜劇オペラ)の最高峰とされ、多くの名作を生み出しました。

ロッシーニのオペラの特徴

1. ベルカント・スタイル:

- ロッシーニは、ベルカント(美しい歌)スタイルの代表的な作曲家です。このスタイルでは、声楽技術、特に色彩感豊かな装飾音や技巧的な歌唱が重視されます。

2. オーケストラの役割:

- ロッシーニはオーケストラの扱い方にも独自の特徴を持っており、特に序曲は非常に有名です。彼の序曲は独立した演奏会用作品としても人気があります。

3. ユーモアと機知:

- 彼のオペラには軽快でユーモラスな要素が多く含まれており、特にオペラ・ブッファではその傾向が顕著です。

4. キャラクター描写:

- ロッシーニのオペラのキャラクターは、しばしばユニークで個性的な性格を持っており、劇的な場面でもコメディの場面でも観客を楽しませます。

オペラ作品

1. 《セビリアの理髪師》(Il barbiere di Siviglia, 1816年):

- ロッシーニの最も有名なオペラの一つで、オペラ・ブッフアの代表作です。物語はスペインのセビリアを舞台に、機知に富んだ理髪師フィガロが、伯爵アルマヴィーヴァとその恋人ロジーナの恋を助けるという内容です。軽快なリズムとキャッチーな旋律が特徴で、序曲や「フィガロのアリア」(Largo al factotum)などが特に有名です。

《セビリアの理髪師(Il barbiere di Siviglia)》**は、ジョアキーノ・ロッシーニが作曲したオペラ・ブッフア(喜劇オペラ)の代表作で、1816年に初演されました。このオペラは、フランスの劇作家ボーマルシェが書いた同名の戯曲に基づいており、ロッシーニの作品の中でも最も人気があり、広く愛されています。

概要

- **作曲者:** ジョアキーノ・ロッシーニ
- **台本:** チェーザレ・ステルビーニ(Cesare Sterbini)
- **初演:** 1816年2月20日、ローマのトル・ディ・ノーナ劇場
- **ジャンル:** オペラ・ブッフア(喜劇オペラ)
- **構成:** 全2幕
- **舞台設定:** 18世紀のスペイン、セビリア

あらすじ

《セビリアの理髪師》は、活発で狡猾な理髪師フィガロが、若い伯爵アルマヴィーヴァとその恋人ロジーナの恋愛を助ける物語です。笑いと機知、そして軽妙な音楽に満ちたこのオペラは、ロッシーニの才能を余すところなく示しています。

第一幕

1. 序曲

- オペラの序曲は、ロッシーニの他の作品でも使用されており、その軽快なリズムと生き生きとした旋律が特徴です。

2. アルマヴィーヴァ伯爵の登場

- セビリアの広場で、アルマヴィーヴァ伯爵は、ロジーナという美しい女性に恋をし、彼女に自分の気持ちを伝えようとしています。彼は自らをリンドーロという貧しい学生に偽装し、ロジーナの気持ちを試そうとします。

3. フィガロの登場

- フィガロは町の有名な理髪師であり、何でも屋として知られています。彼の登場は有名なアリア「Largo al factotum」で始まり、「フィガロ、フィガロ、フィガロ！」というフレーズが印象的です。アルマヴィーヴァ伯爵はフィガロに助けを求め、フィガロは快く引き受けます。

4. ロジーナの計画

- ロジーナは監視の厳しい後見人であるバルトロ医師と暮らしています。彼女もまたリンドーロ(アルマヴィーヴァ)に恋をしており、彼に手紙を書く計画を立てます。ロジーナのアリア「Una voce poco fa」では、彼女の機知と決意が表現されています。

5. 伯爵の変装

- フィガロの助けを借りて、アルマヴィーヴァ伯爵は酔っ払いの兵士に変装し、ロジーナの家に入ろうとします。バルトロ医師は伯爵を追い払おうとしますが、警備兵が介入し、混乱が生じます。

第二幕

1. 音楽教師の偽装

- 再び計略を試みるアルマヴィーヴァ伯爵は、今度はバルトロの友人であり、ロジーナの音楽教師であるドン・バジリオが病気で休んでいると偽り、新しい音楽教師として家にやって来ます。この偽装を通じて、伯爵はロジーナに自分の正体を明かし、彼女の愛を確認します。

2. フィガロの介入

- フィガロはバルトロの注意を逸らし、ロジーナとアルマヴィーヴァが逃げる準備をします。しかし、ドン・バジリオが突然現れ、計画が危くなります。伯爵とフィガロはバジリオを賄賂で黙らせ、事態を收拾します。

3. バルトロの陰謀

- バルトロはロジーナが自分を裏切ったと信じ込ませ、彼女に伯爵が自分を欺こうとしていると吹き込みます。ロジーナは怒り、バルトロに協力することに同意します。

4. ハッピーエンド

- アルマヴィーヴァ伯爵が再び登場し、ロジーナに自分の正体を明かします。誤解が解け、二人は喜びの再会を果たします。バルトロが状況を把握する前に、伯爵とロジーナはフィガロの助けを借りて結婚式を挙げます。バルトロもついに二人の結婚を認めざるを得なくなり、オペラは全員が和解するハッピーエンドで幕を閉じます。

音楽の特徴

- **ベルカント・スタイル:** ロッシーニの作品は、声の美しさと技巧が際立つベルカント・スタイルで知られています。《セビリアの理髪師》もその例外ではなく、特にフィガロやロジーナのアリアでは、技巧的なパッセージが多く含まれています。
- **有名な序曲:** 序曲は、ロッシーニのオペラの中でも特に有名で、独立した演奏会用作品としてもしばしば演奏されます。そのエネルギッシュでリズムカルなスタイルは、多くの聴衆に親しまれています。
- **ユーモアとテンポ:** ロッシーニのオペラにはユーモアが溢れており、《セビリアの理髪師》もその例外ではありません。テンポの速い展開とコミカルなシーンが、観客を魅了します。

まとめ

《セビリアの理髪師》は、ロッシーニのオペラの中でも最も愛され、最も頻繁に上演される作品の一つです。その魅力的なキャラクター、巧妙なプロット、そして美しい音楽は、200年以上経った今でも観客を楽しませ続けています。フィガロの機知、ロジーナの魅力、アルマヴィーヴァ伯爵の恋心、そしてバルトロの滑稽さが見事に絡み合い、このオペラは喜劇オペラの最高峰とされます。

2. 《チェネレントラ》(La Cenerentola, 1817年):

- シンデレラのお話を基にしたオペラ・ブッフアです。ロッシーニはこのオペラで魔法や幻想的な要素を排除し、より現実的で人間味あふれるお話を描きました。主人公アンジェリーナ(シンデレラ)は、逆境を乗り越え、幸せを掴む強い女性として描かれています。技巧的なアリアが多く、特にアンジェリーナの最後のアリア「Nacqui all'affanno... Non più mesta」が有名です。

《チェネントラ(La Cenerentola)》**は、ジョアキーノ・ロッシーニが作曲した全2幕のオペラ・ブッフア(喜劇オペラ)です。1817年にローマで初演され、ヨーロッパ中で大成功を収めました。このオペラは、一般的に「シンデレラ」として知られるお話を基ついています。が、ロッシーニと台本作家ジャコモ・フェレッティ(Giacomo Ferretti)はいくつかの重要な要素を変更し、現実的で人間味のある作品に仕上げています。

概要

- 作曲者: ジョアキーノ・ロッシーニ
- 台本: ジャコモ・フェレッティ
- 初演: 1817年1月25日、ローマのヴァッレ劇場
- ジャンル: オペラ・ブッフア
- 構成: 全2幕
- 言語: イタリア語

あらすじ

《チェネントラ》は、古典的な「シンデレラ」お話を基にしていますが、魔法や妖精の代わりに現実的な要素が使われています。特に、お話を進行役として魔法使いの役割を担うキャラクターは、哲学的な助言者へと置き換えられています。

第一幕

1. アンジェリーナ(チェネントラ)の紹介

- 主人公のアンジェリーナ(チェネントラ)は、貧しいが心優しい女性で、義父ドン・マニフィコと二人の義姉(クロリンダとティズベ)に虐げられてい

ます。彼女は家事をこなすかわら、かつて王が貧しい女性を妻に選んだという歌「Una volta c'era un re(昔々、ある王がいた)」を歌います。

2. ラミーロ王子の登場

- 王子ラミーロは、花嫁を探している途中でアンジェリーナの家に行きます。彼は自分の正体を隠し、従者に変装して登場し、そこでアンジェリーナの美しさと優しさに惹かれます。

3. 仮面舞踏会の招待状

- ラミーロの側近であるダンディーニが王子に扮して、仮面舞踏会の招待状を持ってマニフィコの家を訪れます。ドン・マニフィコと義姉たちは、アンジェリーナを連れて行かないようにとダンディーニに命じますが、彼女は密かに出席することを決意します。

4. ダンディーニの求婚

- 仮面舞踏会で、ダンディーニは王子としてクロリンダとティズベに求婚しますが、彼女たちの性格の悪さを知ってすぐに失望します。

第二幕

1. 仮面舞踏会のシーン

- アンジェリーナは変装し、美しいドレスで舞踏会に登場します。ラミーロは彼女の美しさに驚き、彼女こそが自分の求める女性だと確信します。しかし、アンジェリーナは自分の正体を明かさず、急いで舞踏会を去ります。

2. 残された手袋

- アンジェリーナは去る際に片方の手袋を落とします。ラミーロは手袋を手掛かりに、再び彼女を探し出すことを決意します。

3. アンジェリーナの認識

- ラミーロがアンジェリーナの家に着くと、アンジェリーナは自分が探している女性だと認識されます。ラミーロは彼女の美徳と優しさに感銘を受け、彼女を妻に迎えることを決意します。

4. 和解と結婚

- 最終的に、アンジェリーナは義父と義姉たちを許し、彼らと和解します。物語は、ラミーロ王子とアンジェリーナの幸せな結婚式で幕を閉じます。

音楽の特徴

- **ベルカント様式:** 《チェネレントラ》の音楽は、ロッシーニ特有のベルカント様式で書かれており、滑らかで美しい旋律が特徴です。特に、フィナーレに向けての盛り上がりや、声楽の技巧が求められるアリアが多数含まれています。
- **有名なアリア:**
 - アンジェリーナのアリア「Non più mesta(悲しみはもうない)」は、オペラの終わりに歌われる感動的な楽曲で、アンジェリーナの勝利と喜びを表現しています。
 - また、ドン・マニフィコのアリア「Miei rampolli femminini」や、ダンディーニの「Come un'ape nei giorni d'aprile」も有名です。
- **アンサンブルの美しさ:** ロッシーニのオペラでは、登場人物たちが同時に異なることを歌う「重唱」や「アンサンブル」が特徴的です。《チェネレントラ》でも、複雑なアンサンブルが多く、物語の展開を豊かにしています。

まとめ

《チェネレントラ》は、ロッシーニの喜劇的な才能が際立つ作品で、愛と寛容、そして善良な心の勝利を描いています。魔法や妖精の代わりに、登場人物たちの性格と行動に焦点を当て、現実的な視点から「シンデレラ」の物語を再解釈しています。このオペラは、ロッシーニの他の作品と同様に、巧妙な音楽構造と豊かなキャラクター描写で、観客に長く愛され続けています。

3. 《アルジェのイタリア女》(L'italiana in Algeri, 1813年):

- コミカルな要素が満載のオペラ・ブッファで、イタリアの女性イザベッラが、アルジェリアのデイの宮殿で繰り広げる冒険物語です。リズムの良い音楽とテンポの速い展開が特徴で、イザベッラの機知と勇気が際立つ物語です。

《アルジェのイタリア女(L'italiana in Algeri)》**は、ジョアキーノ・ロッシーニによって作曲されたオペラ・ブッファ(喜劇オペラ)で、1813年にヴェネツィアで初演されました。ロッシ

一二の作品の中でも特に人気があり、ユーモアと魅力的な音楽が特徴です。

概要

- 作曲者: ジョアキーノ・ロッシーニ
- 台本: ジャコモ・フェレッティ(Giacomo Ferretti)
- 初演: 1813年5月22日、ヴェネツィアのサン・ベニート劇場
- ジャンル: オペラ・ブッフア(喜劇オペラ)
- 構成: 全2幕
- 言語: イタリア語

あらすじ

《アルジェのイタリア女》は、北アフリカのアルジェを舞台にした喜劇で、イタリアから来た女性とその地で大騒動を巻き起こす様子を描いています。

第一幕

1. アルジェの状況

- アルジェのバシー(領主)であるイジーノ(イジーノ・ピラマン)は、イタリア女性に興味を持ち、イタリアの女性を自分のハーレムに迎え入れたいと考えています。彼はイタリア人女性を誘拐するための計画を立てます。

2. イタリア女の登場

- イタリアの貴族の娘であるロッシーナ(ロッシーナ)は、彼女の婚約者であるリナルドと共にアルジェに到着します。ロッシーナは非常に賢く、機知に富んだ女性で、イジーノの計画を知ると、彼に対抗するための策を講じます。

3. 恋愛の混乱

- リナルドとロッシーナの恋愛は、イジーノとその家臣たちにとって障害となります。イジーノはロッシーナを自分のものにするために、リナルドを排除しようとしませんが、ロッシーナの機知と策略により、イジーノの計画は次第に崩れていきます。

第二幕

1. ロッシーナの策略

- ロッシーナはイジーノに対抗するために、いくつかの巧妙な策略を講じます。彼女はイジーノのハーレムの内部に忍び込む計画を立て、イジーノを混乱させます。

2. ハーレムの騒動

- ハーレム内での混乱が続き、ロッシーナはイジーノの策略を逆手に取って、状況を逆転させます。彼女の知恵と機転が、物語のクライマックスを迎えます。

3. ハッピーエンド

- 最終的に、ロッシーナとリナルドはイジーノの策略を打ち破り、自由を取り戻します。イジーノは自身の誤りに気付き、ロッシーナとリナルドの幸せを祝福します。物語は、全員が和解し、幸せに包まれて幕を閉じます。

音楽の特徴

- **喜劇的な要素:** 《アルジェのイタリア女》は、喜劇的な要素が豊富で、登場人物たちのコミカルなやり取りや状況が、物語を面白くしています。ロッシーニの巧妙な音楽と歌詞が、キャラクターたちの個性を引き立てています。
- **有名なアリア:**
 - ロッシーナのアリア「Non più mesta(もう悲しくない)」は、彼女の自信と喜びを表現しています。
 - イジーノのアリア「Languir per una bella」も、彼の心情を表現する重要な楽曲です。
- **音楽の工夫:** ロッシーニの音楽には、技巧的なアリアや重唱が含まれており、オペラ全体に活気を与えています。また、アンサンブルやフィナーレの部分で、音楽的な複雑さと楽しさが際立っています。

まとめ

《アルジェのイタリア女》は、ロッシーニの軽妙な音楽と機知に富んだ台本が組み合わさった作品で、観客を楽しませる要素が満載です。イタリアの女性が北アフリカの地で大騒動を巻き起こすストーリーは、ユーモアと感動を兼ね備えたもので、多くのオペラファン

に愛されています。ロッシーニの才能が光るこのオペラは、喜劇オペラの中でも特に人気があり、演奏される機会が多い作品です。

4. 《ウィリアム・テル》(Guillaume Tell, 1829 年):

- ロッシーニの最後のオペラで、フランス語によるグランド・オペラです。スイスの英雄ウィリアム・テルを主人公にした物語で、圧政に立ち向かう人々の姿が描かれています。壮大なスケールの音楽と、特に有名な序曲は、後に多くの映画やテレビで使われるなど、ロッシーニの代表作の一つとなっています。

《ウィリアム・テル(Guillaume Tell)》**は、ジュゼッペ・ヴェルディによって作曲されたオペラで、1829年にパリで初演されました。このオペラは、スイスの伝説的な英雄ウィリアム・テルを描いた作品で、ロマン主義の要素が強く、ヴェルディの代表作の一つとされています。

概要

- **作曲者:** ジュゼッペ・ヴェルディ
- **台本:** フリードリヒ・シル(Friedrich Schiller)による戯曲『ウィリアム・テル』を基に、エドモン・ロスタン(Edmond Rostand)が脚本を担当
- **初演:** 1829年8月3日、パリのオペラ座
- **ジャンル:** オペラ・ブッフア(喜劇オペラ)
- **構成:** 全4幕
- **言語:** フランス語

あらすじ

《ウィリアム・テル》は、スイスの独立戦争とその英雄であるウィリアム・テルの物語を描いています。ストーリーは、テルの勇敢な戦いとその家族、そして彼の盟友たちの物語を中心に進行します。

第一幕

1. オープニングのシーン

- オペラは、スイスの田舎を背景に、テルの家族が農作業をしている場面から始まります。彼の家族は平和な生活を送っていますが、周囲にはオーストリア軍の圧政が広がっています。

2. 反乱の呼びかけ

- スイスの領主による圧政に対抗するため、テルと彼の仲間たちは反乱を計画しています。テルは、スイスの自由を取り戻すために戦う決意を固めます。

3. 高貴な婦人の登場

- テルの妻、ジェシカは、家族を守るためにテルに協力します。彼女は、テルが戦いに赴く決意をし、彼を励まします。

第二幕

1. 祝祭のシーン

- オーストリアの領主ゲルゾンの支配する町で祝祭が行われます。テルと彼の仲間たちは、この機会に反乱を起こす計画を立てます。

2. テルの決意

- テルは、オーストリア軍の将軍に対抗するため、反乱の計画を実行する決意をします。彼の勇敢な行動とリーダーシップが、仲間たちを鼓舞します。

3. 緊迫した状況

- テルとその仲間たちは、祝祭の最中に反乱を起こすために行動を開始します。緊迫した状況が続き、彼らの戦いが本格化します。

第三幕

1. 決戦のシーン

- 戦いは激化し、スイスの独立を勝ち取るための決戦が繰り広げられます。テルと彼の仲間たちは、オーストリア軍との戦いに挑みます。

2. テルの英雄的な行動

- テルは、自らの命を懸けて家族とスイスの未来を守るために戦います。彼の勇敢な行動が物語のクライマックスを迎えます。

3. 勝利と平和の回復

- 戦いが終わり、スイスの独立が勝ち取られると、テルと彼の仲間たちは勝利を祝います。スイスの人々は自由を取り戻し、平和が訪れます。

音楽の特徴

- **壮大な序曲:** 《ウィリアム・テル》の序曲は非常に有名で、特に「スイス軍の行進曲(March of the Swiss Soldiers)」が印象的です。この序曲は、オペラのストーリーの雰囲気を予感させるもので、オペラ全体のテンポとエネルギーを設定します。
- **アリアとデュエット:** テルのアリア「Sombre forêt」や、テルとジェシカのデュエット「L'ombre de mon père」などが含まれており、感情豊かな音楽が特徴です。
- **合唱とオーケストレーション:** 大規模な合唱と精緻なオーケストレーションが、このオペラの大規模なスケールを強調しています。戦いのシーンや合唱の部分では、緊迫感とドラマが一層引き立てられます。

5. 結婚手形 La cambiale di matrimonio、

《結婚手形(Il matrimonio segreto)》**は、イタリアの作曲家ドメニコ・ロッシーニによって作曲されたオペラで、1812年にウィーンで初演されました。このオペラは、ロッシーニの初期の作品の一つであり、彼の作曲スタイルが成熟する過程を示す重要な作品です。

概要

- **作曲者:** ドメニコ・ロッシーニ
- **台本:** ジャコモ・リッツォ(Giuseppe Maria Foppaによる原作)
- **初演:** 1812年2月4日、ウィーンのカール劇場
- **ジャンル:** オペラ・ブッファ(喜劇オペラ)
- **構成:** 全2幕
- **言語:** イタリア語

あらすじ

《結婚手形》は、結婚と陰謀、愛と誤解をテーマにしたコメディックな物語です。社会的な風刺とユーモアが特徴で、ロッシーニの軽快な音楽が物語を盛り上げています。

第一幕

1. 結婚の計画

- アルベルトは、娘のジュリアに相応しい夫を見つけるために、結婚の計画を進めています。ジュリアはすでに秘密裏に結婚を決めており、両親にそのことを知られたくありません。

2. 陰謀と誤解

- アルベルトは、ジュリアに相応しいと思われる婚約者を探し、彼女の結婚を阻止しようとします。ジュリアは、彼女の真実の愛であるフェリーチェと結婚したいと考えており、両親の陰謀に立ち向かいます。

第二幕

1. 計画の進行

- ジュリアとフェリーチェは、結婚を進めるためにさまざまな策略を巡らせます。彼らは、アルベルトとその協力者たちの陰謀に対抗するための計画を立てます。

2. 混乱と解決

- 最終的に、誤解や策略が明らかになり、すべての問題が解決します。ジュリアとフェリーチェは、無事に結婚し、幸福な結末を迎えます。

音楽の特徴

- **序曲:** 《結婚手形》の序曲は、ロッシーニの軽快な作曲スタイルを示すもので、物語の楽しい雰囲気を感じさせます。序曲は、オペラ全体のリズムとエネルギーを設定します。
- **アリアとデュエット:**
 - ジュリアのアリア「Sento un certo malessere」は、彼女の内面的な葛藤を表現しています。

- フェリーチェのアリア「Che c'importa del mondo?」は、彼の感情を強調し、物語の重要な要素を描きます。
- デュエット「Io ti resisterò」は、ジュリアとフェリーチェの関係を深める場面での重要な楽曲です。
- **合唱とオーケストレーション:** ロッシーニのオーケストレーションは、物語のエネルギーと感情を強調する役割を果たし、合唱部分では、オペラのコミカルな要素や社会的な風刺が表現されます。

まとめ

《結婚手形》は、ロッシーニの初期のオペラであり、彼の作曲技術と喜劇的なセンスが融合した作品です。結婚と陰謀、愛と誤解をテーマにした物語が、ロッシーニの音楽によって生き生きと描かれています。物語のユーモアと軽快さが観客に楽しさと感動を提供し、ロッシーニの作曲家としての才能を示す重要な作品です。

8. 泥棒かささぎ La gazza ladra、

《泥棒カササギ(La gazza ladra)》**は、**ジョアキーノ・ロッシーニ**によって作曲されたオペラで、1817年にミラノで初演されました。このオペラは、ロッシーニの作品の中でも特に高く評価されている喜劇的オペラの一つです。物語は、泥棒と誤解、そして喜劇的な要素が絡み合っています。

概要

- **作曲者:** ジョアキーノ・ロッシーニ
- **台本:** ジャコモ・リッツォ(Giuseppe Maria Foppaによる原作)
- **初演:** 1817年5月31日、ミラノのスカラ座
- **ジャンル:** オペラ・ブッファ(喜劇オペラ)
- **構成:** 全2幕
- **言語:** イタリア語

あらすじ

《泥棒カササギ》は、誤解と泥棒の陰謀をテーマにしたコメディックな物語です。特にロッシーニの音楽的な技術とユーモアが光る作品です。

第一幕

1. 泥棒の計画

- 物語は、貴族の家であるラ・ジョヴァンナ家を舞台にしています。泥棒のカササギ(英語で言う“magpie”)が家の中で様々な物を盗んでいます。このカササギは、家の中で誤って大切な物を盗み、その結果、大騒ぎが始まります。

2. 家族の混乱

- ラ・ジョヴァンナ家の家族は、泥棒がいることに気づかずに、家の中で様々な混乱が巻き起こります。泥棒の計画が明らかになり、家族はその正体を突き止めようとしています。

第二幕

1. 誤解と真実の発覚

- カササギによる泥棒の計画が続き、家族はそれが人間の仕業だと思い込んでいます。誤解や策略が交錯し、喜劇的な展開が続きます。

2. 問題の解決

- 最終的に、カササギの正体が明らかになり、家族はその問題を解決します。すべての誤解が解け、物語は幸福な結末を迎えます。

音楽の特徴

- **序曲:** 《泥棒カササギ》の序曲は、活気に満ちたもので、オペラのコメディックな要素を予感させるものです。ロッシーニの典型的な序曲スタイルで、オーケストレーションが特徴的です。
- **アリアとアンサンブル:**
 - 主人公のアリアやデュエットは、キャラクターたちの感情や状況を描写します。特に泥棒のカササギが引き起こす混乱が、音楽を通じて描かれます。

- アンサンブルの部分では、登場人物たちの感情が交錯し、物語の喜劇的な要素が強調されます。
- **オーケストレーション**: ロッシーニの音楽は、豊かなオーケストレーションとリズムカルな要素が特徴です。音楽のリズムやハーモニーが、物語のテンポと雰囲気を設定します。

まとめ

《泥棒カササギ》は、ロッシーニのオペラ・ブッフア(喜劇オペラ)の代表作で、軽快な音楽とユーモラスな物語が特徴です。泥棒と誤解をテーマにしたこの作品は、ロッシーニの音楽的な才能と喜劇的なセンスを示しており、観客に楽しさと笑いを提供します。

ロッシーニの影響と遺産

ロッシーニはわずか 37 歳でオペラ作曲から引退しましたが、それまでに 39 作ものオペラを作曲し、オペラ界に多大な影響を与えました。彼の作品は、後の作曲家にも影響を与え、オペラ・ブッフアのジャンルを確立しました。また、彼のオペラは今日でも世界中で上演され続けており、その魅力的な旋律と生き生きとした音楽は、幅広い観客に愛されています。

ロッシーニはその後もフランスに移り住み、宗教音楽や小品を作曲しましたが、オペラ作曲からは引退し、悠々自適な生活を送りました。彼の音楽は、ベルカント・オペラの最高峰として評価され続けています。

『セビリアの理髪師』や『ウィリアム・テル』などのオペラ作曲家として最もよく知られているが、宗教曲や室内楽曲なども手がけている。彼の作品は当時の大衆やショパンなど同時代の音楽家に非常に人気があった。

かつてはジョアッキーノ(Gioacchino)と綴られることが多かったが、出生届けなどから Gioachino であることが判明したため、ペーザロのロッシーニ財団の要請で、ジョアキーノ(Gioachino)と綴るようになってきており、ここ数年のイタリアでの公演や録音、映像収録では Gioachino 綴りで行われているが、イタリア国外ではまださほど徹底されていない。

生涯に 39 のオペラを作曲、イタリア・オペラの作曲家の中で最も人気のある作曲家だった。ただし、実質の作曲活動期間は 20 年間に満たない。絶頂期には、1 年間に 3~4 曲のペースで大作を仕上げている。彼の作品は『セビリアの理髪師』『アルジェのイタリア女』のようにオペラ・ブッフファが中心だと思われがちだが、実際オペラ作曲家としてのキャリアの後半期はもっぱらオペラ・セリアの分野で傑作を生み出している。しかし、悲劇を好むイタリアのオペラ作家としては喜劇やハッピーエンド作品の比率が高い点で異色の存在ではある。作風も明朗快活で、生前「ナポリのモーツァルト」の異名を取った^{〔要出典〕}。特に浮き立つようなクレッシェンドを好んで多用。これはロッシーニ・クレッシェンドと呼ばれて、一種のトレードマーク化している。

人生の半ばに相当する 37 歳の時に大作『ウィリアム・テル』を作曲した後はオペラ作曲はせず、宗教音楽や、サロン向けの歌曲、ピアノ曲、室内楽を中心に作曲を行った。

略歴

[編集]

- 1792 年 - 2 月 29 日、ペーザロに生まれる。
- 1800 年 - (8 歳)ボローニャに移り住み、ボローニャ音楽学校に学ぶ
- 1810 年 - (18 歳)フィレンツェで一幕のオペラ・ファルサ『結婚手形』を初演。オペラ作曲家としてデビュー。
- 1812 年 - (20 歳)ブッフファ『試金石』をスカラ座で初演。初のヒット作となり兵役を免除される。
- 1813 年 - (21 歳)『タンクレーディ』『アルジェのイタリア女』が初演後たちまち大ヒットしヨーロッパ中に名声が轟く。
- 1815 年 - (23 歳)ナポリで『エリザベッタ』初演。以後この地のサン・カルロ劇場の音楽監督として、精力的にオペラ・セリアの傑作を生み出す。
- 1822 年 - (30 歳)歌手のイザベラ・コルブランと結婚。
- 1823 年 - (30 歳)『セミラーミデ』初演。イタリアでの最後のオペラとなる。
- 1824 年 - (32 歳)バリのイタリア座の音楽監督に就任。
- 1829 年 - (37 歳)最後のオペラ『ウィリアム・テル』を発表。
- 1835 年 - (43 歳)歌曲集『音楽の夜会』出版。

- 1836年 - (44歳)パリを去り、イタリアのボローニャに住む。
- 1837年 - (45歳)ミラノに移り、毎週金曜日に自宅のサロンで「音楽の夜会」を開く。
- 1839年 - (47歳)ボローニャに移り、ボローニャ音楽院の永久名誉会長に就任。イタリアでの音楽教育に力を入れる。
- 1845年 - (53歳)イザベラ死去。
- 1846年 - (54歳)8月16日、高級娼婦のオランプ・ペリシエ(英語版)と再婚。
- 1848年 - (56歳)フィレンツェに移る。
- 1855年 - (63歳)病気治療のため、パリに戻る。健康を回復した後、自宅のサロンで、毎週土曜日に「音楽の夜会」を催す。グノー、サン=サーンス、ヴェルディ、リストなどの作曲家、当時の一流の歌手など、多くの著名人が集った。
- 1864年 - (72歳)私的演奏会にて「小荘厳ミサ曲」初演(公開での初演は死後の1869年)。
- 1868年 - (76歳)11月13日、死去。現在はイタリアのサンタ・クローチェ教会に眠る。

ロッシーニはイタリアのアドリア海に面したペーザロで音楽一家に生まれた。父ジュゼッペ(Giuseppe)は食肉工場の検査官をしながらトランペット奏者をしていた。また、母アンナ(Anna)はパン屋の娘で歌手であった。両親は彼に早くから音楽教育を施し、6歳の時には父親の楽団でトライアングルを演奏したと言われている。父親はフランスに好意を抱いており、ナポレオンが軍を率いてイタリア北部に到達したことを喜んでいており、1796年になってオーストリアに政権が復帰すると、父親は投獄されてしまった。母親はロッシーニをボローニャにつれてゆき、生活のためにロマニャーノ・セージアの多くの劇場で歌手として働き、のちに父親と再会した。この間ロッシーニはしばし祖母の元に送られ、手におえない子供と言われていた。容姿はやや太り気味だが、天使のような姿と言われ、かなりのハンサムだったので、多くの女性と浮き名を流した。

ロッシーニは10代終わりの頃からオペラ作曲家としての活動を始めた。1813年、20歳から21歳にかけての作品『タンクレーディ』と『アルジェのイタリア女』でオペラ作曲家としての評判を確立し、1816年、24歳の作品『セビリアの理髪師』でヨーロッパ中にその名声をとどろかせた。

1816年以降、ウィーンではロッシーニ人気の高まりによって、イタリア・オペラ派とドイツ・オペラ派の対立が巻き起こったが、イタリア派の勝利に終わった。1822年、ロッシーニは『ゼルミーラ』上演のためにウィーンを訪れ、熱烈な歓迎を受けた。このとき訪問を受けたベートーヴェンは『セビリアの理髪師』を絶賛し、「あなたはオペラ・ブッファ以外のものを書いてはいけません」と述べたという^[3]。ベートーヴェンはロッシーニの才能を認めていたが、大衆が自分の音楽の芸術性を評価せず、ロッシーニの曲に浮かれていることに愚痴をもらしている^[4]。

1823年、ロッシーニはパリを訪問し、やはり議論を巻き起こしながらも大歓迎を受けた。この訪問と同じころに出版された『ロッシーニ伝』において、スタンダールは「ナポレオンは死んだが、別の男が現れた」と絶賛している。

1825年、フランス国王シャルル 10世の即位に際して、記念オペラ・カンタータ『ランスへの旅』を作曲、国王に献呈し、「フランス国王の第一作曲家」の称号と終身年金を得る。37歳で『ギヨーム・テル(ウィリアム・テル)』発表後、オペラ界から引退を表明。以後は『スターバト・マーテル』などの宗教曲や小品のみを作曲し、年金生活に入る。1830年の7月革命に際しても新政府と交渉し、前国王政府から給付された年金を確保することに成功した。

一方、彼は若い頃から料理が(食べることも作ることも)大好きで、オペラ界からの引退後、サロンの主催や作曲の傍ら、料理の創作にも熱意を傾けた。フランス料理によくある「○○のロッシーニ風」は、彼の名前から取られた料理の名前である。料理の名前を付けたピアノ曲も作っている。

晩年には淋病、躁鬱病、慢性気管支炎などに悩まされ、ついには1868年に直腸癌になり、手術を受けたが、それによる丹毒に感染して生涯を閉じた。

ロッシーニは従来は教会の儀式などでしか聞くことが出来なかった宗教音楽を、一般のコンサートのレパートリーとして演奏するように尽力した人物である。ロッシーニのこの分野での傑作である『スターバト・マーテル』も、実は一般のコンサートを念頭において作曲されたものである。

作曲家として

パリで貧困生活にあえいでいたヴァーグナーがロッシーニのような作曲家になることを目標にしていたことはよく知られている。また、『ウィリアム・テル』を見たベルリオーズは、「テルの第1幕と第3幕はロッシーニが作った。第2幕は、神が作った」と絶賛している。また『セビリアの理髪師』の作曲をわずか3週間で完成させ、ベッリーニは「ロッシーニならそれくらいやってのけるだろう。」と述べている。

ロッシーニは(同時代の他作曲家の例にもれず)現在の著作権・創作概念からみれば考えがたい行動をとっており、同じ旋律を使い回すのは朝飯前で、『セビリアの理髪師』序曲は、『パルミーラのアウレリアーノ』→『イングランドの女王エリザベッタ』の序曲を丸ごと再々利用している。さらにベートーヴェンの第8交響曲の主題を剽窃し、また機会オペラ^[注釈 3]だった『ランスへの旅』を、細部を手直しただけでコミックオペラ『オーイー伯爵』に作り替えている。

ロッシーニ・ルネッサンス

ロッシーニは死後たちまち忘れられた作曲家となっしまい、『セビリアの理髪師』『チェネレントラ(シンデレラ)』『ウィリアム・テル』(の序曲)の作曲家としてその名をとどめるだけの期間が長く続いた。特に上演や全曲録音はもっぱら『セビリアの理髪師』に集中したため、オペラ作家としては一発屋に近いイメージでとらえられがちだった。しかし、ペーザロのロッシーニ財団が1960年代終わりから出版を開始し現在も続けられているクリティカル・エディションによるロッシーニ全集の出版などをきっかけに、1970年代になるとロッシーニのオペラが再評価されるようになった。リコルディ社から校訂版楽譜が次々と出版されるようになり、それと並行してクラウディオ・アバドがペーザロで『ランスへの旅』を約150年ぶりに再上演し、以後ヨーロッパにおいてアバドなどの音楽家を中心にロッシーニ・オペラが精力的に紹介されるようになり、1980年代以降その他の作品も見直され、上演される機会が増えた。また、クリティカル・エディションの刊行により、長年受け継がれてきた伝統的な歌唱法や、旧版に記されていた間違いなども改めて見直され、よりロッシーニの楽譜に忠実な演奏が試みられるようになった。この再評価の動きを「ロッシーニ・ルネッサンス」という。現在では『ランスへの旅』、『タンクレーディ』、『湖上の美人』をはじめ、ロッシーニの主要オペラがほぼ再演されるようになっていいる。のみならず、あまり知られていない作品の蘇演も延々と続いており、作品数が多いだけに、その活況はプッチーニやヴェル

ディに迫らんばかりの勢いを呈している。ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティバルにおける蘇演、ロッシーニ研究家で指揮者のアルベルト・ゼツダの功績も大きい。

オペラ

- デメトリオとポリーピオ Demetrio e Polibio、1808 年（初演 1812 年 ローマ）
- 結婚手形 La cambiale di matrimonio、1810 年 ヴェネツィア
- ひどい誤解 L'equivoco stravagante、1811 年 ボローニャ
- 幸せな間違い L'inganno felice、1812 年 ヴェネツィア
- バビロニアのキュロス Ciro in Babilonia、1812 年 フェラーラ
- 絹のはしご La scala di seta、1812 年 ヴェネツィア
- 試金石 La pietra di paragone、1812 年 ミラノ
- 成り行き泥棒 L'occasione fa il ladro、1812 年 ヴェネツィア
- ブルスキーノ氏 Il Signor Bruschino、1813 年 ヴェネツィア
- タンクレディ Tancredi、1813 年 ヴェネツィア
- アルジェのイタリア女 L'italiana in Algeri、1813 年 ヴェネツィア
- パルミーラのアウレリアーノ Aureliano in Parmira、1813 年 ミラノ
- イタリアのトルコ人 Il Turco in Italia、1814 年 ミラノ
- シジスモンド Sigismondo、1814 年 ヴェネツィア
- イングランドの女王エリザベッタ Elisabetta, Regina d'Inghirtra、1815 年 ナポリ
- トルヴァルドとドルリスカ Torvaldo e Dorlisca、1815 年 ローマ
- セビアの理髪師(アルマヴィーヴァ) Il barbiere di Siviglia (Almaviva)、1816 年 ローマ
- 新聞 La Gazzetta、1816 年 ナポリ
- オテッロ またはヴェネツィアのムーア人 Otello、1816 年 ナポリ
- チェネントラまたは善意の勝利 La Cenerentola, Il trionfo della bonta' ossia、1817 年 ローマ
- 泥棒かささぎ La gazza ladra、1817 年 ミラノ
- アルミーダ Armida、1817 年 ナポリ
- ブルゴーニュのアデライーデ、1817 年 ローマ
- エジプトのモーゼ Mose in Egitto、1818 年 ナポリ

- アディーナ Adina、1818 年(初演 1826 年 リスボン)
- リッチャルドとゾライーデ Ricciardo e Zoraide、1819 年 ナポリ
- エルミオーネ Ermione、1819 年 ナポリ
- エドゥアルドとクリスティーナ Eduardo e Cristina、1819 年 ヴェネツィア
- 湖上の美人 La donna del lago、1819 年 ナポリ
- ビアンカとファッリエーロ Bianca e Falliero、1819 年 ミラノ
- マオメット 2 世 Maometto secondo、1820 年 ナポリ
- マティルデ・ディ・シャブラン Matilde di Shabran、1821 年 ローマ、ナポリ(改訂版)
- ゼルミーラ Zermira、1822 年 ナポリ
- セミラーミデ Semiramide、1823 年 ヴェネツィア
- ランスへの旅、または黄金の百合咲く宿 Il viaggio a Reims、1825 年 パリ^[注釈 5]
- コリントの包囲 Le siège de Corinthe、1826 年 パリ^[注釈 6]
- モイーズとファラオン Moïse et pharaon、1827 年 パリ^[注釈 7]
- オリー伯爵 Le Comte Ory、1828 年 パリ^[注釈 8]
- ギヨーム・テル(ウィリアム・テル) Guillaume Tell、1829 年 パリ

《セビリアの理髪師》(Il barbiere di Siviglia, 1816 年)

《チェネレントラ》(La Cenerentola, 1817 年)

《アルジェのイタリア女》(L'italiana in Algeri, 1813 年)

《ウィリアム・テル》(Guillaume Tell, 1829 年)

《オテロ》(Otello, 1816 年)

《アルミーダ》(Armida, 1817 年)